

生涯学習 だより

第88号 <夏号>

2024年7月1日 発行

撮影場所：東京競馬場
写真提供：「悠学の会」映像グループ

* 第88号のテーマ *

続けよう・広げよう 新しい試み

P.1 府中市生涯学習センター
館長 岩崎研志さんに聞く

P.2 「悠学の会」20周年記念講演のまとめ
講演者／市職員 英 太郎さん

P.3 「学びを楽しむ・学びを支える」<18>
ポッチャの新展開を探る 石田さん

P.4 「ふちゅう東西南北」市境を越えて
稲城市の学びのポイントを巡る

特別企画 新館長はこんな人

府中市生涯学習センター館長 岩崎研志さん に聞く



ー 簡単に自己紹介をお願いします

国立市生まれの国立育ちです。年齢は56歳。子供のころからスポーツ好きで、小学校時代はサッカー、中学時代は卓球、大学では登山と常に行動的に過ごしていました。就職したスポーツメーカーで役職定年になり、そのまま勤務を継続するか考えているときに異動の話がありました。隣の市に住んでいたこともあり、自然豊かで住みやすい府中市は好きな街でしたので、今年の4月、喜んで赴任することにしました。

ー 館長になって感じたことは

府中市のみなさんは「いろいろなことを勉強するんだな」というのが第一印象でした。生涯学習センターには多様な講座が設けられており、学習者の多さにも驚きました。自分自身もこれまで接したことのない学びに興味があるし、大きな刺激を受けることになるかも知れないと感じています。

ー 館長として心がけていることは？

市民の皆さんに事故が無いよう利用していただく事と、学習センター全体が適正に運営されるよう努めています。それが館長としての大切な仕事だと思います。

そんなこともあり、週に一度は午前6時に出勤して、解錠しながら施設の見回りもしています。そうするこ

とで、スタッフの苦勞の一端もわかってきます。日常の不平・不満・悩みごとなどは、すべて人間関係に起因すると思うので、良いコミュニケーションを心掛けていきたいと思っています。

来館者との直接的な対話も重要です。時には耳が痛いと思う場合もありますが、それはみなさんが私たちの姿を見てくださっているという意味で有難いし、良き理解者になっていただけたと思っています。

ー 生涯学習センターとして目指す方向は？

誰でも気楽に参加できる講座、受講者同士が交流できるような場づくりを目指します。わたし自身も未知のことには興味があるので、講座の内容や受講者のことを理解できるように努めたいと思います。

市民が受講目的で参加することは素晴らしいですが、受講生同士が交流を深める機会があればもっと楽しい場になると思います。

今はコロナによる制約がなくなったので、館内での交流を増やしていきたい。例えば、スポーツの講座で誰もが気軽に参加できる、健常者も障がい者もともに参加できるような、分野を問わない幅広いスポーツ講座などが実現できればと考えています。

<インタビューを終えて>

若い頃からスポーツマンとのことで、管理者然という雰囲気を感じさせない如何にも行動派という印象の方。終始穏やかな笑顔で接する姿勢には、親しみ易さを感じました。馴染みのある府中市で市民との交流を深め、未知のことに取り組んでみたいとの言葉には、自ら先頭に立つ雰囲気も感じられました。今後の運営に大いに期待したいと思います。（取材・文：小林清次郎）

特別企画 悠学の会 20 周年記念講演会の概要紹介

生涯学習ボランティア「悠学の会」の講演会で、市職員の 英（はなぶさ） 太郎さんに「私と生涯学習のかかわり、府中市の歴史で出会った5つの歴史資料」と題し講演していただきました。短い時間で様々なことを伝えたいという熱のこもった講演で、興味深い内容のお話ばかり。概要をまとめ紙面が許す限り紹介します。（概要のまとめ／中濱敬文）



<私と生涯学習のかかわり>

郷土の森博物館、生涯学習センターに勤務し、前者では資料から、後者では事業にかかわることで人から学んだ。自分のために自分に合った方法で自発的に学ぶ—これが私の持論となった。

私的に中国語を学び、視野が広がった。都市交流の仕事

では、府中と似た ウィーン市ヘルナルス区との都市交流を担当して、コミュニケーションの重要性和、文化交流の必要性を感じた。また市史編纂事業では資料編にも携わった。これらにより、現在までにわかったこと、わからないことが明確になった。今後も市史の研究を深めていき、街の発展にも繋げていきたいと思っている。

<府中市の歴史で出会った5つの歴史資料>

(1) 武蔵府中熊野神社古墳

—中国伝来の天文思想はなぜ古墳の形になったか—

円が天を、方形が地を示すという古代中国の「天円地方」の思想の影響という熊野神社の上円下方墳。全国に6つしか見られないこの珍しい古墳について、解説。



司馬遷の史記には、秦・始皇帝の陵墓について「上に天文、下に地理を具える」とあり、前漢・武帝時代の天文書には、天地の形について「天円は張蓋の如く、地方は碁盤の如し」とある。中国古代の人が想像した世界の形がわかる。時代は下って日本書紀・推古天皇 12 年に、十七条憲法三条の役人の心構えとして、君(天皇)は天、臣(役人)は地であるから君の詔には従うように、とある。このように天円地方思想は日本に影響を及ぼし、7世紀中ごろの古墳に影響を与えたのかもしれない。

(2) 多磨寺(京所廃寺)跡出土瓦

—新羅からの渡来人と府中の仏教伝来—

大銀杏で知られる現在の普門寺あたりにあった多磨寺跡から出土した軒丸瓦(左)。その模様は蓮の花を表している。これは統一新羅(676~892年)の宮殿跡や寺院跡から出土した瓦(右)と酷似している。

日本書紀によれば持統天皇元年(687年)に帰化した新羅の僧尼など男女 22 人を、同 4 年(690 年)には 12 人を武蔵国に住まわせたとある。武蔵国の国府であった府中では早くから“異文化交流”がなされていたようだ。



左が府中市宮町出土
右が韓国慶州市出土

この他、下記 3 点も解説いただきましたが、紙面の関係で省略いたします。

(3) 古代の簪(かんざし) 釵子(さいし)

(4) 天文 18 年の北条氏康書状—謎の漂着船はどこからきたのか—

(5) 旧陸軍百式司令部偵察機の尾翼

悠学短信

思い出を語ることは脳の若返りに効果ありといえます。あなたもやってみませんか！
編集部員が、今回取材で訪れた稲城市の思い出を書きました。

《南多摩駅》 府中からは是政橋を渡って直進すると JR 南武線南多摩駅になる。

かつて住んでいた面影をたどって歩いてみた。駅までのあぜ道はなくなり広い車道になっている。駅近くにはホテル「東横イン」が建ち駅も高架になった。駅前にはアニメ「ヤッターマン」に登場するヤッターワンが立っている。子どもたちが喜びそうな迫力あるモニュメントだ。こうしたものが、稲城市内のあちこちに立っているという。ちょっとぶらぶら探してみると楽しいかも知れない。



近代的になったにもかかわらず商業施設はあまりない。かつてよく散歩していた大丸用水が暗渠にもならず残っていて懐かしかった。一部は親水公園として整備され一年中景観を楽しめるそうだ。いつまでも残していってほしい場所である。(井口文江)

《稲城市で思い出したこと》 広い稲城市全域を僅か半日程度で踏破できる自信は無いので、京王線の稲城駅を起点とし、JR 南武線の南多摩駅迄に点在する寺社などを巡ることになった。

暖かで絶好の散策日和の中、稲城駅改札を出ると、近くの電柱に「百村(もむら)」の表示板があった。これを見た瞬間、小学一年時の担任の先生を思い出した。当時現役の先生だったから今の私よりずっと若いはずだが、子供にはとても優しいお爺ちゃん先生だった。「東京都南多摩郡稲城町百村〇〇 S 先生」と年賀状に書いたことを覚えている。

稲城駅近辺の寺社参拝後は、向陽台経由のバスで城山公園に向かったが、向陽台には中学の同級生の一人が引越したと聞いている。最後は南多摩駅に向かう途中で大丸用水に立ち寄ったが、この流れの近くに父が勤めていた会社がある。今でも蒲鉾型の建物が健在で、家族で何度か参加した社員運動会が懐かしい。(竹村 稔)

ボッチャをテコに軽スポーツの普及に取り組む

府中市スポーツ推進委員 石田宜久さん（府中町在住）

今年はオリンピックイヤー。パラスポーツにもまた注目が集まりそうです。最近広く知れてきた競技「ボッチャ」を手掛かりに、府中で軽スポーツが広く行われることに取り組んでいる石田さん。その思いを聞いてみました。



― 府中でもボッチャはよく知られていますね

ボッチャはターゲットの白いボールに向かって自分のボールを投げたり転がしたりして、どれだけ近くに止められるかを競う簡単な競技です。障がいのある方でも取り組みやすいということがあって、パラスポーツとして普及してきました。府中でも東京で行われたパラリンピックに向けて普及に力を入れるようになり、2019年からは「府中ボッチャ大会」を開催するようになりました。都立けやきの森学園が全国選抜ボッチャ甲子園で優勝するなど、パラリンピック出場レベルの選手も出てくるようになりました。

なぜ強くなれたかという、府中市の練習環境が良かったためだと思います。車椅子では体育館を使用することが難しい自治体が多いのですが、府中市では早くから車椅子でも体育館で練習できましたから。



白ボールとの距離で
勝敗が決まる

― 石田さんのボッチャとの出会いは

私は子供の頃からラグビーをやっていて、海外でもプレーした経験があります。大学を卒業してからはラグビーはやっていませんが、何かスポーツで社会に貢献できることはないかと考えていました。そんな時に「スポーツ推進委員」の募集があり、委員になって研修でボッチャを経験したのが初めての出会いです。

市がボッチャの大会をやるようになって、委員として積極的に活動するようになり、いろいろなイベントで体験会を開くなど普及に努めてきました。

オリンピック後、ボッチャはパラスポーツからみんなでも楽しめるユニバーサルスポーツに変わっていききました。ボッチャの最大の魅力はこの“ユニバーサルスポーツである”ことです。障がいの有無、老若男女関係なく、同じルール・条件下でスポーツとしてのゲームを楽しめること。さらに経験があるから強いということもない。実際に府中大会では、初心者的小学



府中市ボッチャ大会の様子

生チームが上位大会出場経験のある社会人チームを破ったこともあります。

「無理」や「絶対」がないスポーツです。おそらく運動神経という点も関係がないのでしょう。

― これからやっていきたいことや目標は

せっかく“ボッチャ”というツールがあるのだから、これをうまく活用して、例えば東京都の大会をやるというものなのではないかと思います。府中市は地理的に東京都の真ん中ですし福祉施設も多い。市内にはパラリンピックに近い選手もいます。パラスポーツの一流選手も招いた大会にできれば、もっと皆さんにも広くパラスポーツを知っていただけたらと思うのです。

また、ボッチャは現在、障がいのある方もそうでない方も等しく楽しめるユニバーサルスポーツになっていますので、多くの方が参加していただいて競い合うことで様々なコミュニケーションが生まれ、障がい者への理解も、もっともっと広がっていくと思います。

委員として子供たちに接していた時のことですが子供たちの中に耳の聴こえない子がいたのです。でも子供たちは何も気にせず自然にコミュニケーションしているんです。大人は変な垣根を作ってしまうかもしれませんがそれがいい。イベントを通じ、こうしたことが当たり前になればと思います。是非実現したい目標ですね。

― ボッチャの普及以外ではいかがですか

スポーツ推進委員として“誰でもどこでもできる軽スポーツ”の普及にも取り組みたいと思っています。

日々健康であるためには、身体を動かすということが大切です。健康寿命を延ばすためにも手軽にすぐできる簡単なスポーツが身近になればと思うのです。若い方には運動習慣がつく、シニアにとってはフレイル予防になる。子供たちにとっても塾やゲーム以外、放課後の選択肢が増える。そんなメリットを多く含んでいるのが軽スポーツです。「ラリーテニス」など府中発の軽スポーツも色々ありますので、できるだけ多くの機会を作って、見聞きする、体験することから、体を動かすことに一歩でも踏み出していただけたらしていきたいと思っています。

いろんな“個別チーム”があって「スポーツタウン府中」になるのではなくて、市民のみんなが気軽にスポーツを楽しんでいるのが「スポーツタウン府中」です。そのきっかけ作りができればと思っています。

― 市民のみなさんに伝えたいことは

膝が痛いから腰が痛いからと動かない方っておられます。でも今は痛いから動かないではなくて、少々痛くても動く、ちょっとは動くという風に流れが変わってきています。そんなことを考えて「ちょっと外に出て動いてみたい」と思えるようなイベントを発信していきますので、もし市内で目にしたら、是非参加していただきたいと思っています。

（取材・文／西谷信昭）

府中から川向うを眺めると、多摩丘陵が広がる。平坦に見える山並みの中に、どんな学びのスポットがあるのだろう。市境を越えての散策取材。今回は南のお隣・稲城市を巡ってみた。



《稲城市散策》 緑樹と薫風の中で、今日は京王線稲城駅より常楽寺-妙見寺-城山公園-大麻止乃豆乃天神社-大丸用水をまわり、南多摩駅を終点とした取材散策です。

お昼12時に集合した仲間達と共に、それぞれの好みのお弁当を抱え、訪問先のお寺にお庭拝借の許可を頂き昼食です。季節を謳歌し咲き誇る色とりどりのツツジの花、日に日に成長した小鳥の声が時折り空に響き、一同笑顔を交えます。

さあ、出発。稲城市は地区により平均斜度が2.7%～6.5%の高低差がありますが、脚は無理なくリズムに乗って進みます。平安時代末期に建立された常楽寺、そして8月に「蛇より祭」の催しが行われるという妙見寺、神仏習合の珍しいお寺です。バスに乗って次は城山公園。ここは都会の騒めきなど知らぬ気に、濃緑と若葉が深まる山肌もあり静謐さを保っています。大自然の中で、黄花カタクリがうつむき加減に一握りの花を咲かせていました。可憐で直向きに生きる草花に別れを告げて、ゴールへと向かいます。(柴田洋子)

《城山公園のカタクリ》 稲城市立中央図書館の裏手の坂道を上っていくと、左右に樹木が生い茂り静かな風が流れている広場に出る。大通りからほんの数歩を入った地点とは思えない静けさで、付近にあふれる香りと涼しさが心地良い。広場の左手には頂上に向かう細い山道があり、山道に沿う斜面にカタクリの群生地がある。カタクリは早春の山を彩る赤紫の可憐な花がひっそりと咲いているイメージで、花言葉は「初恋」「寂しさに耐える」だ。下向きに咲くその姿は、初恋の少女が恥じらいで気持ちを素直に言い出せないような切ない姿を思わせる。ここには珍しい黄色の花も咲いている。



カタクリの花は種をまいてから開花するまでに7年以上もかかるというのに、花の期間はおよそ数日という儚い花だ。非常に敏感な植物で、自然環境が変わると姿を消してしまうこともあるという。この花は地元の方が植えて大事に栽培しているらしいのだが、知る人ぞ知る隠れた名所である。(小林清次郎)

《静寂の寺・常楽寺》 隣接市の取材で稲城市を散策した。最初に稲城を知った昭和の40年代の半ばは南多摩郡稲城町だったが、50年余り経た今日、町は稲城市となり商業施設や住宅環境も著しく変化している。



今回、最初に訪れたのが、印象深い天台宗の寺の「常楽寺」である。稲城市の市街地、京王稲城駅からほど近くでこんな所があったのかと思わせる程の静寂と落ち着きをもつ寺である。比叡山で修行した僧侶が再興したと言われ、都指定文化財の阿弥陀三尊像は市内で最古の仏像である。

その他境内の至る所に立像、坐像がある。ご好意で本堂を開けて貰い観音菩薩、阿弥陀如来、延命地藏、閻魔坐像等を拝ませて貰った。外に出て金色の千手観音をしばし眺める。夏には大賀ハスの鑑賞も楽しめるそうで、今回とは違う風景を眺めてみたい。(渡邊繁雄)

《妙見寺》 京王線稲城駅から散策が始まった。稲城市は、府中市と隣接し色々に関わりがあるのに多摩川の対岸ゆえ歩くことがなかったので、新鮮な気持ちがある。

妙見寺は今回訪れた2箇所目のお寺。同じ名の神社と寺院が隣同士にある。寺の山門の左手前に鳥居があり、まっすぐに伸びた階段を登るとその先にも階段が続く。そこをさらに登るとやっと「妙見尊」の社が現れた。妙見寺の方に何うと昔はこういう形はどこにでも見られたという。ご住職が神社の神職も兼ねておられるとの事。ひっそりとした境内は小山の上にある階段が長く感じられた。静かに建つお社は江戸時代のもので説明がありどっしりと鎮座している。夏には萱(かや)で作った100メートル位の大蛇を使ったお祭りが開かれるという。鳥居の前に柱があり萱の長い綱が渡されていた。これが祭りに使われたものだろうか。本殿の前に立つと賑やかなお祭りの光景が見えるような気がした。(辻 麻美)



《大麻止乃豆乃天神社(おおまとのつのでんじんしゃ)》

行程の後半、城山公園の向かいの小高い天神山に天神社とお寺があるというので立ち寄ってみた

まず驚いたのは、大麻止乃豆乃天神社という白いのぼり旗が参道石段の左右に沢山はためいていること。



地域の人々が奉納したもので、今も天神様がいかに崇敬を集めているかがよくわかる。神社の名前に大変興味を惹かれたので調べてみた。平安時代の延喜式

にも載る古社、祭神は櫛真知命(くしまちのみこと)といい、太古の太占(ふとまに占い)を司る神とされる。自然現象を司る天津神(あまつかみ)である。

参道入り口には神社の別当寺、臨済宗の大悲山園照寺があり、墓苑を含む広い敷地を占めていた。典型的な江戸時代の神仏習合の世界が広がり、永い日本の里の文化を思い起させる。息せき切って階段を登りきると、古い社があり、その周辺には津島神社、秋葉神社や稲荷神社の小さな祠があった。社は鬱蒼とした新緑の樹々に囲まれ、周囲の太い孟宗竹の林が印象的だ。

地域の豊穡と安全をもたらす天津神への信仰はいつまでも続くのだらうと思いつつ、眼下に多摩川の流れと府中の街を眺めながら石段をおりた。(奥野英城)

＜編集後記にかえて＞ 最初に訪れた常楽寺にも、最後に訪ねた円照寺にも六地藏があった、本当によく見かけのお地藏さま達だ。3でもなく5でもなく6というところに仏教的な深い意味があるのだろう。仏教における輪廻転生という死生観を表しているとのこと。人間は、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の6つの世界を輪廻しているのだそうだ。これを六道輪廻という。ぐるぐる回ってはいつまでも抜け出せないではないか。そのうち目が回ってどうでもよくなってしまいうだろう。そこで初めてすべてを超越した涅槃に至るのかな。

苦しむ人に慈悲の心で救いをもたらすのがお地藏様の仕事だそう。苦しむ人、悲しむ人は無限に存在する。お地藏様の仕事も無限だなあ。(中井博子)